

# 協議会への期待(1)

## —十字架の福音を—

生駒聖書学院院长  
アサエル宣教聖書学院院长

榮義之



「なぜなら私は、あなたがたの間で、イエス・キリスト、すなわち十字架につけられた方のほかは、何も知らないことに決心したからです」(1コリント二・二)

「アーメンと言えば救われる」を生涯のモットーとして伝道しています。イエス・キリストの救いを聞いたのは、鹿児島県の種子島で一六歳の高校生の時でした。神が愛であり、人間は罪人であること、その罪の贖いのためにイエス・キリストが十字架上で死んでくださった、墓に葬られ三日目に復活されたことを聞きました。そのことを聞いた日に、イエス様を心にお迎えし救われました。

「なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。

人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです」(ローマ一〇・九一―一〇)の約束のとおりです。

いま日本人に必要なのはこの純な十字架の福音です。私はいつも新しい方々に、「アーメンと言え救われます」と語ります。

日曜日のお昼に近くのスーパーに行きました。パンを一つ買おうとしたら店員が、「一つですか?」と不思議そうに聞いたので、「人はパンだけで生きるものではない」と言うと、もうひとり「聖書の言葉ですね」と応じてくれました。ミッシヨンスクール出とのことでした。話が弾み、「アーメンと言え救われますよ。いまイエス様を心にお迎えなさいませんか」と、パン山の前で決心の祈りをしました。

十字架のことばは、滅びに至る人々には愚かであっても、救いを

受ける私たちには、神の力です。その神の力はみことばを語るとき、聖霊によって人々の心を捉えます。

日本の総福音化を考える時、複合的な要素が多くありますが、やはり第一に福音を伝えることが優先されると確信します。人々は良い知らせを待っています。

私は礼拝に初めて出席された方に、「アーメンと言えば救われます。イエス様を心にお迎えください」と、いつでも率直に話します。ほとんどの方がアーメンと信じる決心の祈りをしてくれました。信じれば救われます。罪が許されます。神の子となります。永遠のいのちが与えられます。

実にイエス・キリストの十字架こそが、全人類の罪の贖いのためでした。病がいやされ、すべてのろいから解放されます。また貧しさから救い出してくれます。死と滅びの束縛から解き放つて天国に希望に耀く人生を体験できます。

イエス・キリストの十字架の福音こそ、いつの時代でも人々が求めていた本質的な問題を解決する救いなのです。

二十一世紀の日本民族の総福音

化は、「権力によらず、能力によらず、わたしの霊によって。」と万軍の主は仰せられる。(ゼカリヤ四・六)との約束により実現されると信じます。

宣教の主役は聖霊であることを認め、聖霊の力に信頼し満たされることです。

聖霊の力に満たされ、祈りの霊に注がれてとりなしをすることも肝要です。

日本の伝道は難しいという否定的な告白を捨て去り、日本を心から愛して愛しぬくことです。愛する者の言うことは必ず聞いてもらえる確信で、福音を伝え続けることです。

神のことばは生きていて力がありません。蒔いた種は必ず芽生えます。日本は道端でも岩地でも、茨の地でもありません。良く耕された良い地です。早や色づいて刈り入れを待つばかりの収穫の畑です。信仰と愛と希望に満たされて、聖霊の助けにより恐れず大胆に福音を語り続けたいものです。日本の総福音化のために、心を一つに協力し合う協議会に、教団教派を超えてともに参加したいものです。

# 協議会への期待(2)

## —望みの時が来た—

小山聖泉キリスト教会  
シティーハーベストチャーチ牧師

新村眞一



韓国では、民族総福音化運動の歴史は長い。現在この運動の総裁であられる申賢均先生とは、かつて本部長として活躍されていた二十数年前からお交わりをいただいており、感謝しています。申先生を通して、按手の祈りの結果私は多くの祝福をいただきました。又韓国を訪れた時には、民族総福音化の事務所にも案内していただきました。こうした申先生との出会いを通して、民族福音化の大切さについて知るようになりました。そして、日本にも民族総福音化運動が始まれば(起こされれば)良いのだが、と強く思わされるようになったのです。

民族総福音化運動は、人の力によって行なわれるものではありません。これは「聖霊様によって行なわれる」ものです。これは又、聖霊運動でもあります。そうして、神の愛によってこの国を愛する「愛の運動」でもあります。私は軍国主義の時代に育った者なので、

「国を愛し、国のために一身を捧げ死ぬことは美しい」と教えられ、それを信じて育ちました。誰でも知っているように、これは、誤ったナショナリズムによる愛国心でした。しかし、民族総福音化運動こそ、神の御心にかなう真の「国を愛する運動」ではないかと私は思うのです。

聖霊様は日本の国の現状をご覧になられて、ちょうど良い時に、この働きを始めるようにと導いておられるように思います。戦後の日本が築き上げた経済、産業、科学技術をもつてしても、今のこの国の現状をどうにもできずにいます。政治の力は不安定で混沌としており、悪の力は世に蔓延し、安心して町を歩けないような世の中です。一方霊的世界では、悪霊は悪しき策略をもって暴れ回っています。今こそ、この国の救霊のために、民族総福音化運動を推進すべき時です。この世は終末の時代を迎え、主イエス様の御再臨が近

づいている時です。「全世界に出て行き、福音をのべ伝えよ」との主イエス様の至上命令を果たすために、私達は大同団結しなければならぬ時です。この国の魂の救霊のため、主の御心を行なうためにあります。とりわけ、この国に主の御業を顕わしていただくためには、この国に住むクリスチャンが一人でも多く集められ、一つ心となる必要があります。私達が目的を持つて一つ心となり祈る時、主は必ずその者達の叫びを聞いてくださると信じています。

しかしこの運動は、決して生やさしいものではないと思います。現実的には大きな困難を伴うのです。悪霊の妨げもあることでしよう。しかし、聖霊様の導きの中で、忍耐深く様々な方法を模索し、前進し続けるならば、必ずや日本にリバイバルの火が燃え上がると信じています。

日本でも民族総福音化運動が始められるに当たって、その経緯を思う時、私はそこに不思議な神の摂理が働いているように感じます。申賢均先生は、元々福音派にもペントコステ派にも属さない方で、そのような中で、激しい聖霊体験をされ、初代教会の流れを汲む信仰を持つようになられたのです。そして、聖霊様によって熱く霊が燃やされて、韓国民族総福音

化のため主に用いられると共に、日本の救霊、リバイバルのために、も長年に亘ってご奉仕下さっています。一方、申賢均先生が元老牧師を務めておられる聖民教会は、かつて先生が主任牧師をなさっていた頃から、手束正昭先生の牧会される高砂教会と姉妹教会の交わりを続けておられます。その手束先生も同じく、福音派でもなく、ペントコステ派でもなかったのに、激しい聖霊降臨の体験をされて後、初代教会の信仰に燃えて、聖霊様と共に福音宣教へと立ち上がられたのです。そして今、日本民族総福音化の窓口として、生涯賭けてこの運動に取り組もうとしておられます。このように共通点のあるお二人の先生方が共に民族総福音化運動の道へと召されたことに、主の不思議を思わされます。そして、これから主がなされる働きに大きな期待を寄せています。この運動を通して、聖霊の風が大きなうねりとなりますようにとお祈りしています。

「私には大きな悲しみがあり、私の心には絶えず痛みがあります。もしできることなら、私の同胞、肉による同国人のために、この私がキリストから引き離される、のろわれた者となることさえ願っていたのです」(ローマ九・二三)。